

私、お漏らし我慢できない
んです！

-マッチングアプリで出会った人が
まさかの同じ会社で
とんでも性癖の持ち主で!?-

大和ソウ

【登場キャラクター】

・結城 小夜 ゆうきさよ

会社員。幼い頃からお漏らし癖がある。

普段はオムツをつけて凌いでいるが、なかなか治らない。

・五十嵐 雄一 いがらしゆういち

28歳。営業課の人気者。

会社では人気者だが、実は特殊な性癖の持ち主で、

なかなか彼女が出来ないでいた。

そんな時に小夜と出会い、自分を開放していく。

-story-

1.私の秘密

2.初めてのセックスはなんの味？

3.おしっこトレーニング

4.陶酔

5.我慢大会

◆私の秘密◆

待ち合わせた商業ビルの前で私はスマホと睨めっこした。

今日これから会う相手は、知らない男の人だ。

流行りのマッチングアプリを初めて三ヶ月。いまだにこれだ！　と思う人が見つからない。

アプリには情報が色々載っていて、詳細に男性を知ることができる。顔は一部が隠れていたりスタンプで全部は見えないけれど、なんとなくの雰囲気分かる。

今日これから会うのは『イガちゃん』というネットネームの男性だ。

年齢は二十八歳。身長は百七十七センチ。趣味は運動。会社員をしていて、普段は営業職だそうだ。載っていた写真は爽やかな顔立ちで、多分イケメン。申し分ない人。

けれど私が重要視しているのはそんなことじゃない。

——はあ、またダメだったらどうしよう。プロフィールには書いてあったけど、いざ会ったら違うってことも多いしなあ。

私がこんなにモヤモヤしているのには理由があつた。

私は幼い頃からお漏らし癖があり、我慢ができない。

下半身の筋肉の問題なのか、とにかく我慢ができない。一日にトイレに行く回数は十回以上。我慢が出来ないからオムツも手放せない。遠方の外出やトイレがない場所に行くのも無理。

こんな体であるせいで、小さい頃から大変だった。

無論、私もなんとかしようとしてクリニックに通ったりトレーニングをして筋肉を鍛えたりもした。けど、全く効果はなかった。

二十代にもなつてお漏らししてる女なんていない。結果私は彼氏ができてても秘密を打ち明けられないから長続きせず、告白されても流すしか出来なかった。

こんな姿を見られたら絶対に引かれてしまう。だから私はマッチングアプリに走った。

止められぬなら止めなければいい。

そういうわけで、性的嗜好が一致しそうな男性を探すため、プロフィールにその項目があるアプリをわざわざ探し、登録した。

項目には色々あった。おっぱいとか、バッグ挿入とか、野外セックスとか、たくさんある。私がその中でも選んだのは、「おしっこ」だ。

ものすごくマイナーなのか、そういった人はとても少なかった。嫌がられそうなことだから、当然なのかもしれない。

けれどおしっこにも色々ある。するのが好きな人もいれば見るのが好きな人もいる。

私はとにかく、このお漏らし癖を見ても引かない人と付き合いたかった。

——— 今度の人は大丈夫。人がしてるのを見るのが好きって言ってたし、私もする方だけだつて言ってるし、きつとうまくいく……はず。

待ち合わせまであと五分を切った時だった。

「あの、もしかして『ユウ』さんですか？」

私のネットネームを告げる人。私はスマホから視線を上げた。

「え!？」

だけど、待ち合わせにふさわしからぬ声上がる。なぜなら、その人は私がよく知っている人物だったから。

「い、五十嵐^{いがらし}さん……？」

薄手のカーディガン、スラリとした長身。爽やかな顔立ち。あのプロフィール通りの人。

「結城^{ゆうぎ}さん……!？」

一方、男性も私を見て驚く。

い
が
ら
し
ゆ
う
い
ち
五十嵐雄一。私と同じ会社に勤める男性。彼は営業課で仕事していて、普段は

週に何度か話す程度。

けれど名前はもちろん知っているし、仕事ぶりも知っている。女性社員から人気があって、陰でキヤーキヤー言われているのを聞いたこともある。

その五十嵐さんがなぜ、ここに。

私は硬直したまま言葉を失った。一方で、五十嵐さんも呆然と突っ立っていた。

——えーと、どういうこと？ まさか、『イガちゃん』が五十嵐さんだったの？ じゃあ私、ずっと五十嵐さんとやりとりしてたってこと……？

最悪すぎる。私の秘密がバレた上に会社の人だなんて。

「えつと……結城さん、ですよね」

「……はい」

知らんぷりして、解散しよう。待ち合わせは別の人としていたと言おう。そう思った時だった。

「あの、どこかでお茶しませんか」

「え？」

思いがけない発言だった。この場が居心地悪いのは五十嵐さんも同じはず。なのにお茶しようなんて。

——もしかして口止めしたいのかな。そうだね、五十嵐さん人気者だし……。

メッセージ内では仲良くやりとりしていた関係だ。話せば通じるかもしれない。「……分かりました」

私は誤魔化すことをやめ、頷いた。

二人で近くのカフェ入る。二人用の小さなテーブルに向かい合わせになり、それぞれドリンクを頼んだ。

五十嵐さんがコーヒーに口を付ける。

「ええと……混乱させて、すみませんでした。『ユウ』さんが結城さんだったなんて……」

「……私も、驚きました」

「なんだか、仕事の時の口調になりますね。色々話したのに」

メッセージの中ではタメ口だった。まさか五十嵐さんだなんて思わなかったし、『イガちゃん』に対して少し好意を持っていたから。

けれど目の前にいるのは五十嵐さんだ。今までみたいには出来ない。

「ものは相談なんですが、結城さん。俺と付き合ってもらえませんか」

「え!？」

驚いてつい大きな声を出してしまう。私は慌てて頭をシュンと下げた。

「す、すみません」

「いや、こちらこそすみません。突然で驚きましたよね」

「あの、どうして……？」

「メッセージの中だけでしたけど、俺は結城さんのこといいなつて思いました。だから、もし気が合うなら付き合いたいなつて。正直、仲良くしてもらえる自信なかったんです。その、性癖のこと」

「あ、ええと……その……でも、五十嵐さんつてモテるんじゃないんですか？」

「モテるかつて言われたら、多分モテてる方だと思います。彼女も、いました。本当のことを言おうと思つたこともありましたが……やっぱり特殊なことなので、難しいだろうな、と」

確かに、女の人がしてるのを見るのが好き、なんて変わっている。そんなことを快くさせてくれる恋人は全体的に見てかなり少数だ。

「だから、結城さんが引かずに俺の話聞いてくれた時、すごく嬉しかったんです」
「それは……」

「俺のこと、男として見れないですか。同じ会社だったら嫌ですか」

「そ、そんなことはありません。五十嵐さんは格好いいと思います。お話も面白いし、楽しいです。素敵な人だなんて思いました。でも……」

——流石に、同じ会社の人にオムツ姿なんて見せられない。してる姿が見たいのかもしれないけど、お漏らし癖なんて、知ったら引かれちゃうよ。

五十嵐さんは私のことするのが好きな人、とだけ思っているはずだ。けれど、実際はそれだけじゃない。

「……やっぱり、駄目ですか？」

「……ごめんなさい。五十嵐さんが嫌いとかじゃないんです。性癖のことも、別に引いたりしません。でも……」

「……すみません。無理を言いましたね」

「いいえ……こちらこそ、ごめんなさい」

「いいんです。気にしないでください。こういうのは慣れてますから」

五十嵐さんは暗くなつた雰囲気と和ませようと笑顔を浮かべる。それを見ると、ますます申し訳なくなつた。

五十嵐さんは素敵だ。付き合えるなら付き合つてみたい。でも、同じ会社の人にドン引きされたらショックだ。

それから私たちは当たり障りない会話を繰り返した。話すのは楽しかったし、会話が弾んだ。本当に付き合えないのが残念だと思ふくらい。

「結城さん、飲まないんですか？」

五十嵐さんが私の前に置かれたアイスティーを見て言った。手付かずのアイスティーが置かれたままになつてゐるから氣になつたのだろう。

「えつと……実はお腹、いっぱいで」

カフェに入つた以上、何も頼まずにいるのは変だから頼んだけど、飲むとすぐにもよおしてしまうから外に出た時はあまり水分を取らないようにしていた。

でも、ここで飲まないと五十嵐さんが氣分を悪くするかもしれない。さつさと歸りたいのだと誤解されるかもしれない。

「そう、ですね。ちよつとだけ飲むことにします」

私は半分ほど口にして、ストローから口を離した。

カフェから出て二人で歩く。今日はもう解散しようということになった。元々、お茶するだけの予定だったから、予定の通りだ。

「会社で会ったら、できればいつも通りにしてください。俺もそうしますから」

「はい。分かりまし——きやつ!？」

不意に、足が何かに引つかかって前のめりに倒れてしまう。私は手を出すように派手に転んだ。

「いつ……た……」

ハッとして慌ててお尻を確認する。スカートが捲れ上がって、履いていたオムツが若干見えていた。猛スピードでスカートを元に戻す。

そのまま、ゆつくりと視線を上げた。当惑したような顔をする五十嵐さんが見えた。

——絶対見てる！ 今の絶対に見られた！

恥ずかしい。穴があつたら入りたい。まさか五十嵐さんに見られてしまうなんて。せつかくこのまま無難に終わろうと思っていたのに！

「あ……あ、の……その……」

言い訳しようとするけど、言葉が出てこない。なんて言えいいかも分からない。どう言えば理解してもらえらるだろうか。

「——あの、結城さん」

「は、はい……」

「俺の家、来ませんか」

この状況で、私はもはや頷く以外に選択肢が思いつかなかった。五十嵐さんが脅すような人じゃなかったとしても、このまま何事もなかったかのように帰れる自信がなかった。

「どうぞ、入って」

五十嵐さんの家は分譲マンションだった。当然だけど私が住んでいるマンションは賃貸だから広さが全然違う。

「五十嵐さん、あの、ご家族の方は……」

「俺、一人暮らしですよ。ここは祖父が買ってたマンションを貰ったんです。だから誰もいません」

なんとなくほつとする。でも誰もいないという点が少しだけ不安だった。

「適当に座ってください。お茶とコーヒーがありますけど……」

「い、いいです。お構いなく!」

「そうですか……」

彼は少しがっかりしたようだった。私はダイニングの椅子に腰掛けた。

——家まで来ちゃったけど、オムツのこと言われたらどうしよう……っ。

会社でバラされたりしたら……。

「わざわざ来てもらってすみません。外だと、込み入った話ができないなと思って」

「わ、私になんの話ですか」

「すみません。さっき見てしまったんですが……結城さん、その……オムツ、してました、よね？」

見られていた。やっぱり見られていた。

顔が熱い。どうしてあんな何もないところで転けてしまったのか。スカートなんか履くんじゃなかった。

「あ、あの……え、と……」

「すみません。多分、見られなくなかったですよね。でも、余計に黙ってられなくて……」

「お、お願いしますっ！ このことは黙っててください！」

「え？」

「小さい頃から、私ずっとお漏らし癖があつて……オムツしないとダメな体質なんです！　そういう性癖とかじゃなくて……だから、理解がある人が欲しくて、その……」

こんな言い訳だ。きつとオムツ好きの放尿癖のある女だと思つただろう。大人にもなつてこんなオムツして、情けないつて引かれてしまう。

「……そうだったんですか。辛かったですね」

五十嵐は否定しなかった。それどころか優しい言葉をかけてくれた。口先だけかもしれないと思つたけど、嘘くさい顔には見えない。

「ごめんなさい……つ騙すつもりじゃ、ないんです……ただ恥ずかしくて……」

「いえ、言いづらいことだと思ひます。俺もずっと人に言えなかつたから。気持ち分かりますよ。大丈夫。誰にも言わないし、安心してください」

私は心底安心した。

「だから、俺と付き合ってもらえませんか」

「……え、ええっ!? な、なんですか!？」

「なんでって……俺は、君のことがいいなっと思ってたし、さっきの話を聞いて、俺なら理解してあげられるんじゃないかって、そう思ったんです」

「でも……」

「結城さんは理解がある人を探してあのアプリに登録してたんですよ？　なら、どうして俺と付き合えないって答えたんですか？」

「……こんなの……きつと嫌だろうなって、思ってた……」

「嫌じゃないですよ。正直に話してくれて嬉しいですよ。俺は引かないし、結城さんとうまくやっていけると思う。もちろん、結城さんも俺を理解してくれたら嬉しいですよ」

私は少し迷った。五十嵐さんは格好いいし、素敵な人だ。さらに私のことを理解してくれるのなら、願ってもない申し出。

「い……いいんでしょうか」

「もちろん。是非」

「じゃあ……お願い、します」

五十嵐さんは嬉しそうに笑った。

なんだか夢みたいだ。『イガちゃん』さんが五十嵐さんで、私と付き合うことになるなんて。夢じゃなかったらどうしよう。

「これからよろしく。あ、会社ではいつも通りでいいかな。俺は別に付き合ってるって言っても大丈夫だけど」

「な、内緒でお願いします！」

五十嵐さんと付き合ってるなんて知られたら噂の的になってしまう。できればそういうったゴタゴタは避けたい。

「分かった。じゃあそうしよう」

「ありがとうございます。あ——」

「どうしたの？」

——やばい。さっきアイステイー飲んじやったから、出そう……。

「あ、いえ……その、お手洗い借りてもいいですか？」

五十嵐さんの家で申し訳ないが、トイレを借りることにした。

けど、五十嵐さんは答えず、なんだか視線をウロウロさせている。

「……見たら、駄目かな」

「え……」

そうだった。そういえば、五十嵐さんは人のおしっこしてるのを見るのが好きなだった。

でも、付き合ったばかりですよ？ オムツしてた女のおしっこ見たいんですか？ 次々疑問が湧く。

「え、えと……あの……その。実は……私、する方、って言ったけど、人に見せたりとか、そういうのしたことなくて……その、見られるのが好き、ってわけじゃないんです」

あ~~~~~私の馬鹿！ せっかく付き合ったのに！ でも、人に見られるなんて恥ずかしい。私はただ、この癖を理解してくれる人が欲しかっただけだ。

でも……五十嵐さんは、自分の性癖を理解してくれる人を探してたんだよね。こんな人、なかなかいないし……。

「あー……そっか、うん。ごめん。そうだね。いきなりすぎたね」

「あ、いえ……その……な、慣れてないんです！ 嫌じゃありません！ だから、その……五十嵐さんが見たいのと、違うかもしれないですけど……」

決して否定しているわけじゃないことをアピールする。私の誠意は伝わったのか、五十嵐さんは「分かったよ」と頷いた。

「話してくれてありがとう。俺も、無理にするつもりはないから。ただ、まあ……期待してないわけじゃないけど」

「……じゃあ、見ますか……？」

おずおずと申し出る。五十嵐さんは期待したような目をしていた。

「うん」

ともかくにもトイレに行かないことには始まらない。私はトイレを探した。

「玄関入ってすぐ横だよ」

あたふたする私に五十嵐さんが教えてくれる。

トイレの扉を開け、スカートをたくし上げようとした時だった。はた、と気がつく。後ろを振り返ると五十嵐さんがいる。

「あ、あの。恥ずかしいんですけど……」

「気にしないで、俺は空気だと思つて」

「そ、そんなの無理ですよっ……う……」

私の恥ずかしさとは裏腹に排尿感が襲う。我慢していたら本当に漏らしてしまう。私はオムツを少しだけ下ろすと、なるべくスカートで下半身を隠すように便座に座った。

「結城さん、それだと見えない」

「でも……っ」

「見せて」

五十嵐さんに真顔で圧をかけられ、私は仕方なくスカートをたくし上げた。隠していたオムツも、アソコも、全部見えてしまっている。

「は、恥ずかしい……っ」

「出していいよ。見てるから」

「……っあ」

チヨロチヨロと尿道口からおしっこが漏れ出す。量は大したことない。勢いもない。

顔を上げると、五十嵐さんが目の前に膝立ちになって私のおしっこが出るところを見ていた。

なんだか恍惚をした表情だ。会社で見る彼じゃない。まるで自分がおしっこしてるみたいに気持ち良さそうな表情。

「結城さん……すごく、可愛い」

「い、言わないでえ……こんなの、恥ずかしいだけなのに……!」

「そんなに溜まってなかったのかな。カフェでも飲んでなかったし」

「……は、あ……」

ようやく全部出し切る。すつきりしたけれど、恥ずかしいのは相変わらずだ。私はすぐにペーパーホルダーに手を伸ばした。

「待って」と、五十嵐さんの手が止める。

「舐めたい」

「ええっ!？」

「結城さんのしてるところ見たら、すごく舐めたくなった。駄目？」

「だ……駄目に決まっています！ おしっこなんて汚いじゃないですか。こんなの舐めちゃ駄目ですよ！」

「そんなの、男の精液も一緒だと思うけど」

いやあ、まあそうなんですけど……。

五十嵐さんは興奮したのか、なんだか真剣な様子だ。

けど、舐めるなんて申し訳ない。おまけに人に舐めさせたことなんてないから、ものすごく恥ずかしい。これだつたら見るだけの方がずっと良かった。

「五十嵐さんは見るだけの人じゃないんですかつ」

「相手がいなかったから。でも結城さんの見てたら舐めたくなくなっちゃって」

かなり難しい選択だ。ここで断ると気不味い。しかも付き合ったばかりだから余計に。これで速攻別れて会社で顔を合わすのも気不味い。

「うう……な、舐めるのはまた今度でもいいですか……？　その、恥ずかしいので……」

私はぎゅつと目を瞑り、顔を背けた。

「……分かった。じゃあ、もう少し見させて」

五十嵐さんが一歩近づく。

「結城さん、もう少し前に座って、あと、脚を広げて」

私は黙ったまま腰を前にずらし、便座のギリギリ縁に腰掛けた。かなり背中にもたれるような形で、便座の後ろの方に手を付き、つま先を立ててゆつくりと足を開く。

——うう、恥ずかしい。こんなの誰にも見られたことないのに。

五十嵐さんの体が私の足の間に入る。太ももに手が触れて、思わずビクツと動いてしまう。

「ああ……すつごいおしつこの匂いがする」

「い、言わないでえ……」

顔が近づく。五十嵐さんの指が伸びて、私のアソコに触れた。

「……っあ!? んっ……い、五十嵐さ——だめ、そこ触っちゃ……っ」

五十嵐さんはおしつこの穴をツンツンと指で突いた。ゆつくりと、くすぐるみたいにそこに触れる。蟻の巣を確認する子供みたいに真剣な表情をしている。

やがて、くちゅ、と指を穴の中に入れた。尿道……じゃない。もう一つの穴の方だ。

「ああっ、やだぁ……つだめ……！ 入れないでえ……汚いからあっ」

押し寄せたのは嫌悪感ではなく、快感。私は味わったことのない感触にぞくぞくと身体が震えた。

何か探るみたいに中で指が動く。お腹の奥の方がムズムズしてきて、またおしっこが出そうになった。

「い、五十嵐さん……っ駄目！ 出ちゃうっおしっこ出ちゃうからぁ……っ！ 抜いてっあ、いや……っ！ あ、あぁ……っ！」

我慢できず、私はまたおしつこを漏らした。ピュっ、ピュっ、ピュっ、と断続的に出たおしつこは便座よりも外、五十嵐さんの顔と服に飛び散った。

「ああ……駄目って、言ったのに……ついやあ……」

指が引き抜かれる。五十嵐さんはようやく顔を上げた。

「可愛い……結城さん。すごく可愛かったよ」

「汚いの……っお、おしつこいっぱいかけちゃったじゃないですか……っすごく恥ずかしかったんですから！」

「でも、気持ちよかった？」

「……っ」

「二回目のは、気持ちよくて漏らしちゃった？」

「凶星だ。否定できない。」

「うん、やっぱり結城さんは可愛いよ」

「もうっ……からかわないでください！」

「俺は本気なんだけど」

理解がある人を求めたけど、こんな私を可愛がってくれる人がいるとは思わなかった。五十嵐さんは楽しそうに笑う。全然、嫌じやなさそうだ。

——付き合うって言ったけど、本当に良かったのかなあ。

よく分からない偶然から、こうして私達の交際はスタートした。